

印象深い思出と解決したい課題

浅 香 幸 雄

歴史地理学会は昨春創立満二〇周年を迎え、米倉会長の広島で記念大会を開き、その記念紀要も今春学会に提示した。こうして本学会はいよいよ青年期に入る。まさに思出多き二〇年ではあるが、この機に印象に残る二・三について、求められるままに綴らせていただくことにする。

一、機関誌は紀要形式で

創立総会にあわせ行われた研究発表会のテーマは「歴史地理学の本質と方法」であった。創立草創期に、つぎに起ってきたのが学会（当時は研究会）の機関誌をどうするかということであった。そのころまでにできていた地理関係の諸学会（日本地理学会をはじめ、人文地理学会・東北地理学会……）は、すべて雑誌形式をとり、年一二回四回ものを出していた。わが学会は、会員数、したがって発表数を考え、紀要形式で年一回発行するということとなった。

紀要は、いままで各号ともテーマ主義をとつてきているが、これもそのときにきまつた。それにはいろいろな意見があつたが、A、新学会であるので既製の諸学会に対して新機軸を出そう、というのが

第一であつた。B、それに学会の財政ということもあつた。何しろ創立当初の会員数が一〇〇人余、半年しても一三〇人位しかにならない。一〇〇〇円程度の会費で、学会を運営してゆかねばならないので誰しも運営費が頭にくる。テーマ主義にすると、それは大学の卒論研究の手引書につかわれるかも知れない。それによつて会員外にも買われてゆくとの学会運営を助けてくれることになる。それには、「自由論題中心の雑誌よりもよりよいであらう」といったところで、テーマ主義に落つた。それが大当りとはいえないが、バックナンバーは年とともに減つていつて、いまは最近発行の月号分だけしか残らないという売上好調の原因になつたのではなからうか（何しろ、紀要第一号の印刷代が発行後一年しても払えず、次年度の会費の前納分で埋めていた当時からすれば、何をするにも財政のことを考えねばならなかつたのである。それから、C、テーマであるが、これは学会の大会テーマに一致させることにした。すなわち現在まで慣例となつていゝものであるが、それは紀要にのせる論文は、会員多数に聞いてもらい、いろいろな意見を聞き、のち自らも検討を重ねたものを掲載すべしという論文作製の一般論そのまま（逆にいえば、学会の討議を経ないものは載せるべきではない）を實踐してゆこうというのが基本姿勢にあつたのである。

こうして、第一号の「原理と方法」について、第二号は歴史地理学の実証的研究のはじめとして「地域の変貌」……と号を重ねることになつたのである。しかし、その売れゆきは順風満帆とはいえず会員に対して、それぞれの勤先の図書館の購買図書に加えてもらつ

たり、講義の準テキストにつかたりもして、販売速度を早めるのに協力をお願いしたのであった。

この紀要・大会の論題をテーマにする―その発表者が成稿して次号にのせる―という方式は二〇号をこえた紀要の内容の充実と学会財政を補ってきたことは否めないと思う。途中で財政事情もあつて発行予定の一号分が遅れていたが創立数年後に同じ年に二冊を出して、その欠を補えるようにまでなつた。また紀要編集は、会員・役員の大分の労力奉仕によつて行つてゐるが、それが莫大であるので、「出版社に編集を代行、そして発行」してもらふべく交渉したが、受入れられなかつたこともある。どの学会も経験してゐる創立数年間の難行の一つといえよう。畠山文化財団が学会の助成にも応じてゐられることを聞いてそれを頼み、数回にわたつてそれを頂戴することができたのも、あるいはこうしたままとまつた業績（本になつてゐる）も考慮されてのことであらうか。

とにかくこうして歴史地理学紀要は、発行数は延一万数千にのぼり、研究者の座右に届けてゐるのである。これは会員通信から会報に発展した本学会の忠実で有意義な大きな業績といえよう。

二、東京以外での大会

学会がその本部のあるところ以外の地で大会を開くことは、歴史地理学会だけのことではない。いまはむしろ学会らしい学会の常例となつてゐることである。歴史地理学会もそれを何回か行なつてきている。初期の夏の長野・富山の両特別学術大会をはじめ、近年は

京都・広島など会長さん方の拠点地域での年次大会が行われるようになった。それぞれ本部所在地では求められない貴いものを得てゐる。

最初の長野夏期大会（於長野大学―旧称本州大学）は、初めてのことであり、準備期間も十分とはいえなかつたが、会場の大学や地元市町（上田市・丸子町）、県地理学会、県教委、県内の教育諸団体（中高校の社会科や地理研究会）の大変な協力のもとに行なわれた。開会のときに会場が超満員（約三〇〇〇名）であつたのは先ずビックリした。巡検が第一日の夕刻（丸子・上田近郊）と第二日の終日の二回にわたつて行なわれ、いづれも大型バス三台にマイクロバス二台が動員され、第二日は北国街道上を軽井沢、ついで中山道を望月宿―和田峠―霧ヶ峯―諏訪のコースで、単独行ではとても望めないコースの案内を受けたことが印象的である。

富山夏期大会（於富山大学）も盛んで充実してゐた。これも開会時に二〇〇名近くが集まつてゐた。会員のほか扇状地同人会・地学会・大学教官（経済・文理・教育三学部とも）・県史編さん室の関係者がそれぞれ次々と研究発表に立たれ、地域認識を大変深め得た。巡検は富山湾岸の新港地域を皮切りに、古代（越中国府・国分寺・一の宮）、中世（俱利伽羅古戦場・井波の寺内町―彫刻）、近世（高岡城・瑞竜寺・高岡銅器・庄川松川除堤―砺波平野の防水）の代表的史跡・文化財、それに砺波の散村（個人宅の内外も拝見）と豊富なスケジュールであつたが巧みになされた。このときも、県・経済同友会・商工会議所・関係市町から大きな援助が寄せられた。

京都・広島はともに会長のもとで、会員も多く、それらが中心となつて眞の学会の名にふさわしい、充實した研究発表の連続であつた。巡検は二班もつくられ、大阪と奈良方面をまわり、広島では広域化した市域のほぼ全域と宮島にわたつて、それぞれ現地認識を深めることができた。両大会とも関東からの参会者も多く、いままでも案内だつたブランクを十二分に埋めることができた。

来年は東北での大会準備が進められていると聞く。これも大きな楽しみである。

こうして、歴史地理学会の大会の開催網は、次第に拡大され、中央日本から西南日本、そして東北日本へと全国をおおうことになりつつある。そして今まで他学会の機を利用してようやく得られていた日本の諸地域についての認識は、これからは焦点を歴史地理にほぼつて急速に拡げられていくことになるのであり、歴史地理学を飛躍的に発展させることになることであろう。

三、歴史地理学会の発展と課題

こうして創立当初一〇〇人そこそこで発足した本学会は、現在は六〇〇人近くにまで増加した。また大学における歴史地理学の研究・教育機構上の位置づけもまた拡大をみつつある。例えば、筆者の在職していた現筑波大学も、新機構の発足にあつて地球科学系の地理学が増設されたほか、歴史・民俗系に歴史地理学の一講座（講座組織は筑波大にはないが）が設けられている。また同学の地球科学系教官の外国留学が著しく多くみられるが、外国の地理学における歴史地理

学の比重の大きいこと（七〇％は歴史地理学）に認識が深められ、その影響がみられつつあることも聞いている。長期にはなるが、将来、地理学の研究方法に歴史地理学的方法がとり入れられてはくことは否めないであろう。教養課程の地理学が歴史地理学の方角を強めることも考えられる。

小中高の教育課程は、過般来の改訂が次第に実施段階に入りつつあるが、歴史地理方法のとり入れを強調する考えが強まりつつあると聞く。

こうして、地理学の研究と教育の方角が次第に歴史地理学的傾向を強めることになり、われらが年来主張している地域研究の方角が、緩徐ではあるが我主張の方角より動きつつあることは認められるところである。

こうした歴史地理学人口の増加、地理学の研究と教育、それと義務教育や中等教育における教育方向等を考え併せると、それをいち早くから推進して来た本学会の先驅的役割は大きく評価され、また将来に向かつて極めて重要な役割をはたすのである。

それに対処して、すでに学会執行部では会報を発展させて「雑誌」への案が検討されていると聞く。そうした構想が打ち出されたことは、本会が物心両面に充實しつつあり、意欲的活動をつづけているしるしである。会員の業績の早期掲載と学会としての中心活動がより活発化し、進展することによって結構である。ただ上記もした如く、いままでも本会が中心的発表機関としてきた紀要との関係、雑誌発行についてのプラス面とマイナス面について冷静・慎重に紀要と

雑誌の両立の可能性と具体的方法、それに経費もともなりことな
で財政面からの吟味をも加えて、妥当線を導出した上で、その実施
に踏み切って頂きたいのである。

さらにもう一つ、歴史地理学会は、目下のところ、その法的位置
づけは任意学術団体である。これを学術会議が学術団体と公認する
認定学会―学術会議の会員候補者推せん、出版助成金の配分、その
他公式資格をもつ―にすることであろう。学会としての業績は二〇
号にあまる紀要がそれを証し、会員の分布は全都道府県にわたり、
その資格は十二分に充たしている。そして近き将来において公式的
にも日本の有力学会の一つとなることを望み、その早期実現を期し
て頂きたいのである。

創立以来満二一年学会の発展のために全力を傾けていただいた会
員・役員諸兄をはじめ、温かい援助を賜わった畠山文化財団はじめ
公私各種の諸団体に対して、改めて心から感謝し、今後の健闘をお
祈りし、また御鞭達をお願いするものである。

(昭和四一ノ四八年度、会長および常任委員長兼務 専修大
学文学部教授・東京教育大学名誉教授)